

柳田雑記（10） - 番外編

ミールサイト・スルタンガリエフ(Mir Seyyit Sultan Galiyev, 1882年7月13日 - 1940年1月28日)は、ロシア革命期のタタール人民族主義者、革命運動家。

現在のバシコルトスタン共和国のウファ県ステルリタマク郡にて生まれた。1907年、カザン師範学校(露: К а з а н с к и й у ч и т е л ь с к и й и н с т и т у т、英: Kazan Teachers Institute、現 en:Tatar State University of Humanities and Education) カザンのタタール人師範学校(英: Tatar Teachers College)を卒業後、ウファ市立図書館で勤務する。新聞社での記者活動を経て、1917年にロシア共産党に入党。入党後は、カフカース派で共感を覚えていたヨシフ・スターリンに大抜擢され、中央ムスリム人民委員部委員、ムスリム軍事参与会議長、民族問題人民委員部(露: Н а р к о м н а ц、英: Narkomnats)の機関紙『民族生活』(露: Ж и з н ь Н а ц и о н а л ь н о с т е й、英: The Life of nationalities)の編集長を務め、ムスリム出身の党員では党内の最高位まで登りつめた。

スルタンガリエフは、ソ連のタタール人社会を、資本主義の前段階にあるものとして位置づけ、すでに資本主義化したロシア人社会とは異なるアプローチで社会主義システムを建設する必要があると主張した。また、西洋の帝国主義から植民地を解放する上で、民族主義や宗教の役割を高く評価した。

スルタンガリエフは、著作『ムスリムに対する反宗教宣伝の方法』において、党内で一般的であったイスラームを反動的宗教とする考えを否定し、人間と社会の間のバランスを取る存在としてイスラームを評価している。また、帝国主義諸国に植民地化されたイスラーム世界において、イスラームは反帝国主義の思想になり得ると主張した。

こうした思想を背景として、スルタンガリエフは、ソ連領内のテュルク系諸民族による統一した自治政府の必要性を主張し、ヴォルガ川中流域の「タタール共和国」・「バシキール共和国」、トルキスタンの「トルキスタン共和国」の設立活動を行った。エンヴェル・パシャの裏切り(バスマチ蜂起)によって汎テュルク主義が奨励されなくなり、その同年 1923年に反ソ運動を行ったということで逮捕され失脚。1940年に処刑された。

ペレストロイカ期の歴史の見直しの過程で、1990年にソ連邦最高裁の決定により名誉回復がなされた。

スルタンガリエフ・中央アジアへの鎮魂歌 山内昌之

1986年、ソ連のカザフスタンではブレジネフ体制の象徴とも目されたクナーエフ政治局員の解任を機に、カザフ人の間に大きな反発が生じたのである。これは民族明代のマグマの噴出として、その後のソ連における民族問題関係の複雑さを見事に浮き彫りにした。

ソ連が解体したには、1991年12月のことである。中央アジアの国々はせいかいでも珍しいことだが、自ら積極的に望んだわけでもない独立をはからずも手にいれたのである。他の大きな共和国に続いて、中央アジアの一角にあるタートルスタンもロシア連邦から独立せんばかりの勢いであった。タートルstanは、中央アジアとロシア連邦を結びつける地理的な位置を占めていたからだった。またタートル人は歴史的にも、商業や信仰や学術の面でも中央アジアの人々の動きや思潮をリードしてきた。

しかしアメリカのメディアはタートルスタンがロシア連邦の解体を内部からうながす要因ではではないかと注目したのであろう。旧ソ連の下では一共和国にすぎなかったタートルが何故にスルタンガリエフの生誕百年祭を開くことになったのか。旧ソ連や中央アジアでも目立った存在でなかったスルタンガリエフが日本で歴史の暗がりから復元された直後にペレストロイカの行方を暗くする要因として民族問題が深刻になった。すると日本でもスルタンガリエフの遺産について、論じられるようになったのは皮肉なことである。

足跡に派手さがまるでないこの人物は、タートル人出身のムスリム民族共産主義者でありイスラム東方世界における社会主義の独特な性格を強調した。「社会主義」といえばいまでは落ちた偶像でしかないが中央アジアでもおおきなインパクトをもった時期もあった。しかしそれは最初から積極的な影響だけでなく、否定的な意味合いでも現れている。

1917年の革命の成功をおさめたボルシャヴィキことロシア共産党は、中央アジアに対する領土経営をロシア帝国と同じくらい熱心に進めた。そのようなやり方は、共産主義というというイデオロギー、赤軍や秘密警察という武力や暴力、欺瞞と空手形にあふれたユートピア、党による水も漏らさぬ監視と圧力などを複雑にかみ合わされた。ロシア帝国の征服はスターリン政治体制の野蛮な肅清によって完成したかのようであった。農業集団化がひきおこした遊牧民の強制定住、家畜の絶滅、人為的な欺瞞と共に中央アジアの人びとが数百万とう単位で死に追い込まれた。

ボルシェイヴィキは、ロシア帝国が中央アジアを植民地として利用したと批判したが、自らの工業化のためにそれをソヴィエト内部の「中央に対する周縁」または「社会主義植民地を放置したままだったことには口をつぐんだ。しかもソビエト工業のために綿花や天然資源を搾り取っただけでなく自然環境や衛星の破壊、核実験や核実験や人体実験、など人道的に到底許されない行為があきずすすめられてきた。化学肥料

や成長促進剤のゆきすぎた使用によって、幼児死亡率が跳ね上がり、母親達は彼女達自身の母乳が汚染されているという理由から赤ん坊に授乳しないように警告された。平均寿命の短縮は現在の中央アジアの一番の苦悩である。ソヴィエト時代で起きた「犯罪」としか言いようのない醜聞をいくつかヒイテミル。スルタンガリエフが活躍したボルガ中流域では、1987年には魚の三分の一が農薬中毒で死んだ。中央アジアでは飲料水の中に農薬が検出されるのも珍しくない。一万ヘクタール以上の土地が衛生基準値を上回るDDT濃度を含んでいる。土地によっては、基準値の2倍から8倍にもおよぶという。旧ソ連の中央アジアでは、綿花や野菜の収穫に生徒を動員することも珍しくなかったが、ある日、玉ねぎに触っただけで生徒達が中毒にかかってしまった。その農場では基準値の130倍もの農薬が含まれていることが発覚した。

1990年のウズベキスタンでは、毒性のキノコを食べた43人が入院したが、うち2人の子供が死亡している。このキノコは食用種であったが、有毒化学物質や農薬公害などで汚染されていた、また、アラル海の醜聞についてはもはや指摘するまでもないだろう。乾燥した湖から吹き上げられた塩が、640キロメートルも東のチムケントのように、遠く離れた土地の植物まで破壊してしまった。チムケントが「緑の町」の意味だというのも皮肉なことである。

もっと悲惨なのは、1953年の大気圏内の核実験に際して、カザフスタンノセミバラチンスク州のある村の住民が事実上の「人間モルモット」として用いられたケースである。40人の人間モルモットは、他の村人たちが実験の前に避難させられた後にも土地に残されたという。40人全員がガンにおかされ、1990年には34人がすでに死んでいた。

実験停止後もカザフスタンの人々は忌まわしい記憶と影響から免れなかった。カザフスタン住民700万が今でもなんらかのガン症状を呈している。

こうした象徴的な事例を見ているだけで、中央アジアは旧ソ連内部の第3世界だったことがわかるだろう。この地域は本国＝中心(メトロポール)の繁栄を支えるための犠牲を偲ぶべき衛星＝周縁(サテライト)にすぎなかったのである。これが社会主義ユートピアの陰に隠れた人間＝民族抑圧の闇の部分であった。こうした悲惨な現状を予見するかのように、欧米中心のマルクス主義古典理論を修正することによって、「第3世界」の重要性に初めて着目したアジア出身の社会主義者こそ、スルタンガイエフだったのである。

「かりにイギリスで革命が勝利してとしても、この国のプロレタリアートは現在のブルジョア政府の政策を追求し、植民地を抑圧し続けるであろう。なぜなら、イギリスのプロレタリアートは植民地の収奪に利害関係を持っているからだ。東方の労働者に対する抑圧を避けるために、われわれは地元の自立的な共産主義運動のもとでムスリム民衆を団結させねばならない。」

スルタンガリエフのこの言は、1918年つまり革命成が成就した翌年のことである。かれはイギリスの例をロシア共産党ことボルシェヴィキのイデオロギーや活動にたいする真意をオブラートに包む素材として用いている。その意図を理解するには、「イギリス」という語句を「ロシア」に置き換えればよい。結局、かれは他の中央アジア人はもとより、ウクライナ人やグルジア人といった非ロシア人、もいち早く察知したように、ボルシャヴィキ体制が往々にしてロシア人中心主義の支配に終わることさえ感じていた。

スルタンガリエフの欧米中心主義批判は、現在であればエドワード・サイードの「オリエンタリズム」を彷彿させる文明論を伴っている。「社会革命と東方」という記念碑的な論文は、「東方を搾取してやまないヨーロッパとアメリカのけばけばしいブルジョア文化文明と文明の建設力」に「間接的な寄与」を強いられるのが東方だと断定している。

「白人」の物心両面にわたる富の不当は分け前はすべて東方でかすめとられ、多彩な皮膚をもつ数億の「土着」人種の勤労大衆による血と汗とをぎせいにしてちくせきされた」しかし、徹底した欧米世界批判とコロンブスなどの白人嫌い、それと対になるアジア・イスラム世界中心主義を打ち出しながら、社会主義にたいする異形の眼差しも謙虚に持ち合わせている。スルタンガリエフの姿勢は、アメリカの論壇やアカデミイで言論の自由を享受しながらリベラルな民主主義を冷笑的に懐疑する世紀末のアラブ系比較文学者サイードの屈折したコンプレックスよりもはるかにすがすがしい。スルタンガリエフの率直なコロンブス館などは、いまのネイティブアメリカンやアフリカ系アメリカ人がよんでも批判に耐えるはずだ

クリストファー・コロンブス！この名はヨーロッパ帝国主義者の心の中で愛され、いとをしげに語られる。しかし、まさに彼こそヨーロッパの略奪者のためにアメリカへの道筋を「切り開いた」のである。イギリス、フランス、スペイン、イタリア、ドイツなどは、「土着」のアメリカの略奪、破壊、荒廃におしなべて一役買った。「土着」アメリカの犠牲において自分たちの資本主義的な都市とブルジョア帝国主義文化を建設啞したのである。

ティムールやジンギ・スハーンなどのモンゴル諸侯のヨーロッパ侵も、ヨーロッパ人が「発見した」アメリカかれらが蹂躪して行った残虐行為のまえではすべて色あせてしまう。(社会革命と東方 1919)

この前後で展開される容赦のないアメリカ文化批判も妥協がないだけに、その素朴な迫りに驚かされる。「アメリカ」を「ロシア」に、さしあたり「インカ」や「アメリカ・インディアン」を「イスラーム」「中央アジア」などにおきかえてみると、スルタンガリエフの告発の意図がおぼろげながら浮かび上がってくる。

「平和をあいする」現在のアメリカ人と「進歩と技術」に富んだその「コスモポリタン」な文化を作るため荷は、数千万ものアメリカ原住民とブラック・アフリカ人を滅亡、させ、

すぐれた「インカ」文化を地上から根絶やしにする必要が会った。シカゴ、ニューヨークそしてヨーロッパ化された他のアメリカ諸都市の摩天楼の雄姿は、非人間的なプランターが責め殺した「アメリカ・インディアン」と黒人の死骸の上に、そして破壊されつきし煙がくすぶる「インカ」都市の廃虚のうえにうちたてられたのだ」

こうしてみると、スルタンガリエフはアジア社会主義の先駆者というよりも、ナショナリズムと社会主義を折衷しようとしたムスリムだったといえるだろう、私がかれの思想を「ムスリム民族共産主義、」と呼んだ理由もお分かりいただけるだろう。

「ムスリム諸国の人民は、プロレタリアート民族の性格をもっている。経済事情からみると、イギリスやフランスのプロレタリアートと、モロッコやアフガニスタンのプロレタリアートには大きなへだたりがある。ムスリム諸国の民族運動が社会主義革命の性格を帯びている点こそ強調されねばならない。これと同様の傾向はロシアムスリムの民族的な願望のなかにも現れている」

この文章からも想像されるように、ドイツとロシアの活動を基本軸とするコミンテルンに寄せる眼差しも厳しかった。スルタンガリエフは国際革命の司令塔たるコミンテルンがヨーロッパ中心主義に傾向していると批判して、アジア・アフリカの抑圧された民族ロシア革命の影響を受けたタタール人など中央アジアのムスリムだったことはいうまでもない。

たしかに、欧米のケースをみれば分かるように、社会主義はそれだけでは植民地主義の解毒剤にはならない。ルノーやクルップの労働者たちは資本家から利潤の「おこぼれ」をもらって、豊かな生活を営むことができた。それも結局は植民地を市場や原材料供給地としてもっているからである。

こうして、スルタンガリエフは植民地世界の民族による欧米に対する逆ヘゲモニーの行使を不可欠と考えた。かれは「人類の発展的な変容がかかっている物理的な諸要因は、工業中心地に対する植民地。半植民地の独裁樹立に酔って初めて獲得できると」として、周縁による中心へのヘゲモニーを強調していた。ロシアも工業中心地の一角にあるのでこのヘゲモニーを受けなくてはならない。こう考えたスルタンガリエフの構想が植民地インターナショナルなのであった。

「この壮大な構想を実現するためには、植民地地域を単一の第3インターナショナルからは自立する。第3インターナショナルは、以前のインターナショナルと同様自分自身とも対立し、工業社会の代表たちが支配したからだ。この植民地インターナショナルは、抑圧された全人民をつつみこむであろう」

スルタンガリエフに言わせるとロシア人ボルシェヴィキが優位に立つソヴィエトロシアが、植民地インターナショナルに加入資格をもたないのは理の当然である。20年代になされたと思われる説明は断定的ですらある。

「共産主義的ではあるが工業列国でもあるソ連は、植民地インターナショナルから排除されねばならない。ただしロシアのムスリムはそれに加入するものとする」

ロシア人ムスリムとの力関係を逆転させてムスリムの逆へゲモニーを夢見ることは、共産党の根本教義に疑いをさしはさむ作業に繋がってしまう。しかいこれだけでは党の万能の指導者スターリンの感情を異様に昂らせることにはならない。決定的なのは、書記長の党運営の手法をひはんして、トロッキーに接近したことはなかったろうか。スルタンガリエフエフは40年1月にモスクワのルビヤンカ監獄で処刑されたこのが分かっている。

それから半世紀たって、この人物はペレストロイカたけなわの90年6月ようやく名誉が回復された。かれが華々しく活躍したカザン市の公民館前にはスルタンガリエフ広場がつくられて、タタールスタン共和国の市民が散策しながらその往時を偲ぶようになった。その平和な光景を私が見たのは名誉回復の直後90年7月の下旬であった。人々の明るい様子を見るにつけても、ようやく中央アジア新しい自由の時代が来たのだと私も実感したことだけは昨日のように懐かしく思い出すのである。